小田原の夏

牧野信一

青空文庫

忘れる

「暑さ、涼しさの話。」

おや〳〵、もう夏なのか！

僕は忘れてゐた。——それで、壁の鏡をのぞいて見ると僕の額は玉の汗だ。なるほど僕は薄いシヤツ一枚だ、白いパンツだ。いつ頃僕はこんな身なりに着換へてゐたことか？

この机の一輪ざしには桃の花が活けてある。だから僕は、未だ、夏になつてゐるとも思はなかつた、誰が活けたものなのか知らないが、何時にも窓をあけることもなしに、煙草を喫しながら時折眼をそゝいでゐた花だ。

だが、今はじめて、仔細にみると、何だ！　これは造り花か！　蜘蛛の巣が張つてゐるではないか、馬鹿々々しい。

棄てゝしまへ！

そして窓をあけて見よう。

タンク

あゝ、泳いでゐる〳〵、あんなに沢山の人が、何とまあゝ面白さうに！

僕も、このまゝ、素ツ裸になつて飛び出したくなつたが、僕の机の上には、冬から春へかけての季節を背景にした苦しい文章の草稿が、戦乱の原野の如く、四散してゐる……夜も昼もなく、そして、この戦ひには、春も夏もなく——僕は、タンクの如く、野を過ぎ、丘を寄切り、山を越えて行かなければならないのだ。——さうだ、この窓は、タンクの展望口だ。うか〳〵と、あけツ放しで、口などあけて、渚の方などを見惚れては居られないのだ。

どうせ、タンクの中は蒸し暑いに決つてゐる。

夢

そんなことを思つて、午休みに僕はゆれ椅子に凭つてうとうとゝ居眠りをしてゐると、潜航艇の乗組員になつた夢を見た。

「僕ははじめて、これに乗つたんだけれど、そして、もつと不気味なものかと想つてゐたが、これぢや僕は自分の書斎にゐるのと少しも変らないよ。これで、これが、そんな深い海の底を走つてゐるのかと思ふと、嘘のやうだ！　面白い〳〵。」

「今、黒煙りのやうなものが窓先をかすめたらう。あれは吾々の五倍も大きい蛸入道だぞ。」と傍らの士官が説明した。

「あそこに、しのんで来たのは敵艦かな？」

「あれは、大烏賊の主だ。」

「デビル・フイツシユ奴！」

いつの間にか私は、ラツパ手であつた。吾々は、それらの怪物を退治に来た決死隊なのであつた。

艦内は、にわかにどよめいた。

「ラツパ卒！　何故、戦闘準備の合図をせんのか！」

斯う云はれるまでもなく私は、一生懸命にラツパを吹いてゐるのであつたが、何うしても音が出ないのである。私は、無茶苦茶に焦れて、渾身の息をこめてゐるのであるが、鳴らない、不思議だ。デ

ビル奴等の妖術に翻弄されてゐるのか――。

私の全身からは滝のやうなあぶら汗が流れ、私はラオコーンのやうに身悶えた。

夕風

夕暮時に吾家から通じて来た電話――。

「高輪（たかなは）のS子さんが来ましたよ。若しお暇があつたら明日から、あなたに泳ぎを習ひたいんですつて、えゝ、今日も行つたわ。浜から見えたわよ。あなたが居眠りをしてゐらつしやるところが。お午寝なんてしてゐる位ゐなら、是非明日から、海へ来て下さいね。」

青空文庫情報

底本：「牧野信一全集第三巻」筑摩書房
　　2002（平成14）年5月20日初版第1刷
底本の親本：「雄辯　第十九巻第八号（八月号）」大日本雄辯会講談社
　　1928（昭和3）年8月1日発行
初出：「雄辯　第十九巻第八号（八月号）」大日本雄辯会講談社
　　1928（昭和3）年8月1日発行
入力：宮元淳一
校正：門田裕志
2011年8月1日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

小田原の夏

牧野信一

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/